

これからの社会を生き延びるために

『**転換期を生きるきみたちへ 中高生に伝えておきたいたいせつなこと**』の編者である内田樹氏は、この本を編集した目的は「これからこの転換期を生きてゆかなければならない少年少女たちに、彼らが生き延びるために少しでも役に立ちそうな知見を贈ること」だと述べています。「より良く生きる」とか、「充実した人生のため」などではなく「生き延びるため」という表現から、内田氏が「転換期」と呼ぶこれからの時代は大きな困難を抱えた時代だと考えていることがうかがえます。

この本は中高生であるみなさんの世代に向けて書かれています。複数の人が書いた文章を集めたアンソロジーで、著者として名を連ねているのは、政治学者、生命学者、哲学者、映画作家、文筆家、文芸評論家など実にさまざまな肩書を持つ人たちで、それぞれが専門家の立場から、これからの転換期を生きる中高生たちに伝えたいことを述べています。おおむね著者たちは、中高生が「**社会の現状を正しく理解する**」こと、もしくは「**これから生きていくために一人一人が物事についてどう考えていくか**」のどちらかの観点からみなさんへのメッセージを伝えているように思います。

前者の観点から述べられているのは、少子化、原発、憲法、愛国心、地域共同体など日本社会が抱えている大きなテーマです。例えば少子化については、事業家で文筆家の平川克美氏が、日本は歴史上初めて人口減少の時代を迎え、2100年には人口は現在の半分以下、高齢化率は40%以上になるという予測データを示した上で、少子化の原因は、よく言われる経済的問題（お金がないから子どもを産まない）だけにあるのではなく、日本社会の「進歩」による晩婚化こそが直接の原因だと述べています。それを踏まえて、現在の結婚制度に基づいたものとは違った形の家族・子育てのあり方を支援していく仕組みを作ることも考えなければならないと述べています。転換期には、これまでの常識にとらわれない考え方が求められるようです。

後者の観点については、例えばコラムニストの小田嶋隆氏が中高生の持つ夢や職業観について書かれています。小田嶋氏によれば、現代では子どものうちから「夢=将来就きたい職業」を持つようにとよく言われるが夢=職業という図式はここ30年くらいで定着した新しい考え方なのだそうです。それ以前の時代の多くの大人たちは、夢と職業は正反対のものだと考えていて「食っていくために働かないといけない」とシンプルに断言し、そのことが当時の人々の楽観性を支えていたと述べています。現代のように職業が安易に「生きがい」や「自己実現」と結びつけられていることは、かえって子どもたちを苦しめている（望む職業に就けなかったら人生失敗だと考えてしまう等）のではないかと危惧しています。働くことの素晴らしさやくだらなさはある程度の期間それに携わってみないと分からないものであり、職業の入口に立つ前の段階で自分の向き不向きを決めつけてしまうのは無謀なことだとも小田嶋氏は言っています。また職業への信仰を持つことは、特定の職業に就いている者、あるいは就いていない者への差別を生じさせる恐れがあるとも指摘しています。

この本はさまざまな人により、いろいろな分野にわたって書かれています。共通しているのは物事の根っこを理解することを促しているという点です。編者の内田氏は、読者の年齢と知的経験値を中高生に限定することによって、話がどうしても「根源的」にならざるを得ない。そして「**転換期には物事を根源的に考えることが要請される**」という内容のことを述べています。物事を「それってそもそもどういうことなの？」と根源的に捉えることで本質が見えてきて、自分がどう行動したら良いかが分かってくる、というのがこの本に一貫して流れている考え方なのではないかと思えます。

内田樹氏は、この本を含めて現代社会を生きていく上でのヒントになりそうな本をたくさん書いておられます。下に何冊か挙げてみたので、ぜひ手にとってみてください。

『**転換期を生きるきみたちへ 中高生に伝えておきたいたいせつなこと**』

内田樹編 晶文社 2016年

『**続・中学生からの大学講義1 学ぶということ**』内田樹ほか著 ちくまプリマー新書 2018年

『**街場の教育論**』内田樹著 ミシマ社 2008年

『**大人のいない国**』内田樹 鷲田清一著 文春文庫 2013年

『**日本辺境論**』内田樹著 新潮新書 2009年